

あの夏
ぼくは

絵・焦茶 / 詩・岩倉文也

天使を見た

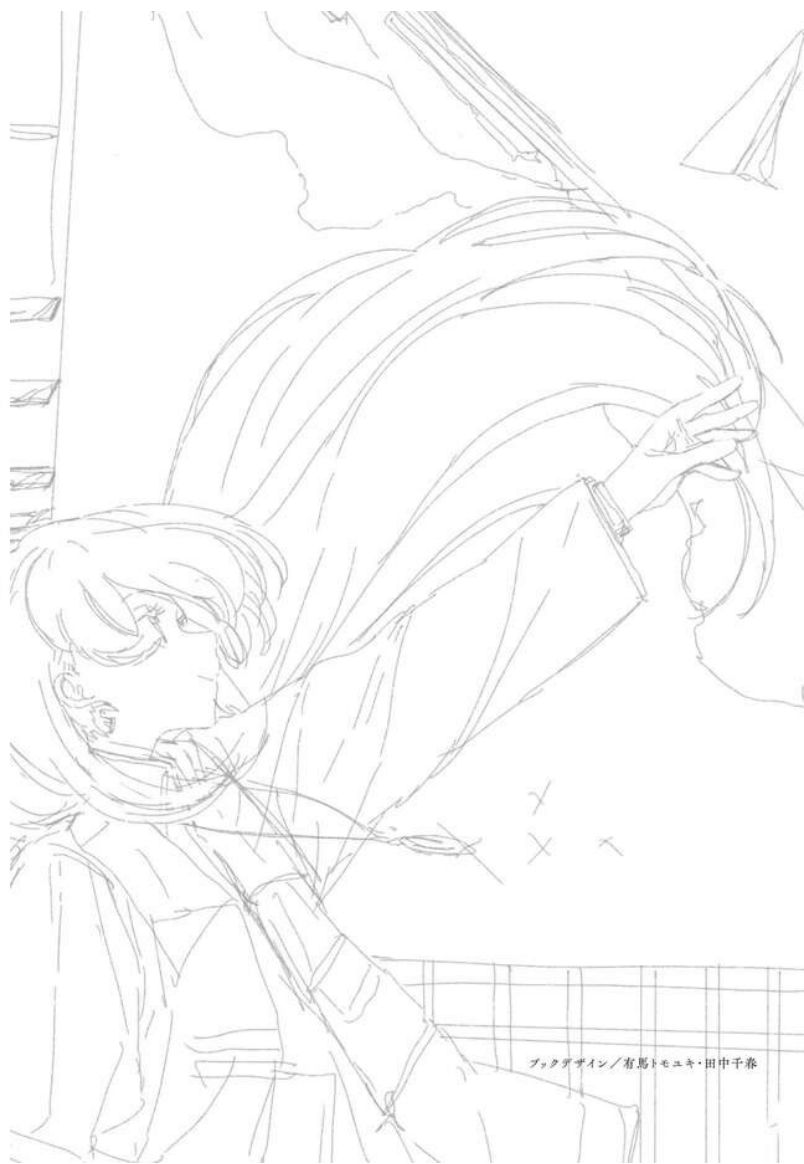


天使の夏を
見ぼたくは

絵・焦茶 / 詩・岩倉文也



そしてぼくは光のこえをたぐりよせ
あわだつ橋をわたってしまふ



目次

【第一部】

そしてぼくは光のこえを……

モノローグ

はじまりの場所て

天使の瞳

挨拶

不安

位置

遅延

死亡通知

休息

光の東に目を細め

初夏よ 死は香りたつ……

唇の湿りのひとく……

やるせなくなる夢だから……

忘れられた言葉は空の……

夢もまたひとつの声に……

妄想のなんてやさしい朝だろう……

みずきわに咲く花枯れて……

人知れずながれるあめの……

との時間切れも愛しい星下がり……

八月の肌をなされる水の……

ふいに目覚めふいに眠って……

その日にはその日の地獄……

死の眠り きのうは花を……

臉まで濡れる きみの手の……

ほんとうはだあれも好きじゃ……

ゆめうつうつみへとつづく……

【幕間】

【第二部】

愛はそらの上からふいに……
うす青いからすにゆびを……
点滴のどこまでもただ……
全部嘘でしかないことの……
ゆれる船ゆられる肌の……
日々の音 ひろいあつめて……
影に影重ねてばくら……
冬の空 きみはことばに傷ついて……
そこだけが冷たい自室……
死ぬのはいつもぼくの内部の空……
持つものの何ひとつない……
リセットをするたび夜の……
曇ろうか 手折ればゆめも向日葵も……
非在の翅

きみのいる公園

告別

ゆめうつり

question

施錠

誘惑

夕立

約束

名前

夢はまたゆめの終わりを……

日向のなかに

あとがき

ひとりであることが多かった。
ひとりである時、身体がすこし軽くなった。

潮風が吹いてゆく。
すべての道を吹いてゆく。

ぼくには分からない。
どうすればいいのか、どこへ行けばいいのか。

夏になった。

いきものが死んだり、生まれたりした。

考えないほうがいいんだ、きっと。
感じないほうがいいんだ、きっと。

ぬるくなったジェーヌを
道端へ捨てるように

捨ててしまえばよかった。捨ててしまえば
自由になれるはずだった。

だけど、ぼくは。だから、ぼくは。
——その日、ひとりの少女に出会った。



第一部





海。触れない夢のかたち
空。届かない明日のさよなら
道。池れないきみの思い出

ぼくは追っていた

光の残骸を

それは見る角度によって

ぼくの絶望や

すり切れた未来へと近づいていた

街。帰れない過去のしずけさ

羽。掴めない声のしたたり

夏。戻れないことの 残酷な純粋の中で



天使の瞳

思い出には
奈落のように底がない
という
恐ろしさのために
人は
この世界から消えていくのかもしれない
ぼくは
きみのうす青い瞳に射すくめられたとき
ふと
そう思った



天使、という一語がぼくの頭に浮かんだ。そのことは瞬く間にもつれ、魚になったり、墜ちてゆく鳥になったりした。潮風。間断なくこの街の、うつろへ駆けてゆく潮風。死んでいるのだろうか、ぼくは。耐えているのだろうか、ぼくは。振向けば視野の、末端にたなずむきみへ、ぼくはどんな挨拶をすればいいのか。こんなにも時の、透明な光を浴びて。



不安

ぼくは
きみを見ていると
ぼくが
ぼくであることに
不思議と
自信がもてなくなる
それは
きみがいつも誰かに
似ているからだろうか
きみが
いつも誰にも
似ていないからだろうか

位置

うちよせる波の
とおのいた風の
かなしみの羽の
とけてゆく夢の
あおぞらの胸の
ゆるやかな道の
かわかない影の
にげだした水の
からっぽの街の

中心に立って
きみは
すべてを見ることが
見ないことの
危うい均衡に立って
きみは
ぼくという器に
きみという沈黙を
注ぎつづける



遅延

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの視線はさびしさの
中でいくともたらまよう

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの耳ではうみなりの
響きがドアをノックする

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの鼻へとしおかげの
香りはそっとながれ込む

言葉はいつもおそいから
言葉はいつもとかない
きみはひかりの輪を浮べ
ひとりて海をながめてる





諦めるたび身体は軽くなってゆく。
夢を、愛を明日をあかるさを諦める
たび軽くなってゆく。そしてある
日、ある瞬間ぼくは宙にういてい
る。だが、どこへ行く、こんなにも
軽い身体で、せめてかなしみの錘
があればここにいられる。けれどぼ
くは今朝、かなしみの死亡通知を、
街中にばら撒いたばかりだった。

疲れはぼくに
新鮮なものの愛さを与えてくれる
胸の深いところで
水平にしずむ空を感じる事ができる
一片の雲もない
ましてや
一片の苦悩もない それが
この街のほんとうの姿である と
告げているかのよう
風は
無垢という真空へ
果てもなく
吹き抜ける





光の束に目を細め

前ふれもなく去った人の
夏のこした眼差しのように
風のなかくてめくれてゆく
日焼けした木のページには
どんな面影も重ねてはいけ
日に乾いた窓がらすは
へだてるためにあるのではないから
揺れうごくものはつねに淋しく
ひろがりにはうしずむ沈黙は
どこにも届かない

そっと頬をなでてゆく
白いゆびさき
ふり向いたらもう
取りかえすことはできないと知っていた
きみは見えない場所
聞こえない場所にかくされていた
ぼくのひとりであることに
砂浜の砕かれた貝殻は
いつまでも砕かれたまま
それが慰めであるような
時間のまわりをぼくは
歩きつづける

幕間



初夏よ 死は香りなつたましいのかたちを持たぬことの証に



唇の湿りのひとくかなしく
天から落ちる電波に触れる



やるせなくなる夢だから蟬たちの声 発熱の正午は過ぎて





忘れられた言葉は
空のかたすみこ
なぜぼくたちが
歌うか知らず

夢もまたひとつの声になるだろうここから先を海へとゆけば



妄想のなんてやさしい朝だろう
こぼれた水もそのままにして



みずぎわに咲く花枯れて折りから
折りへ愁を運んでゆこう



人知れずながるあめのひとしずく
しずかにゆめに傾く街で

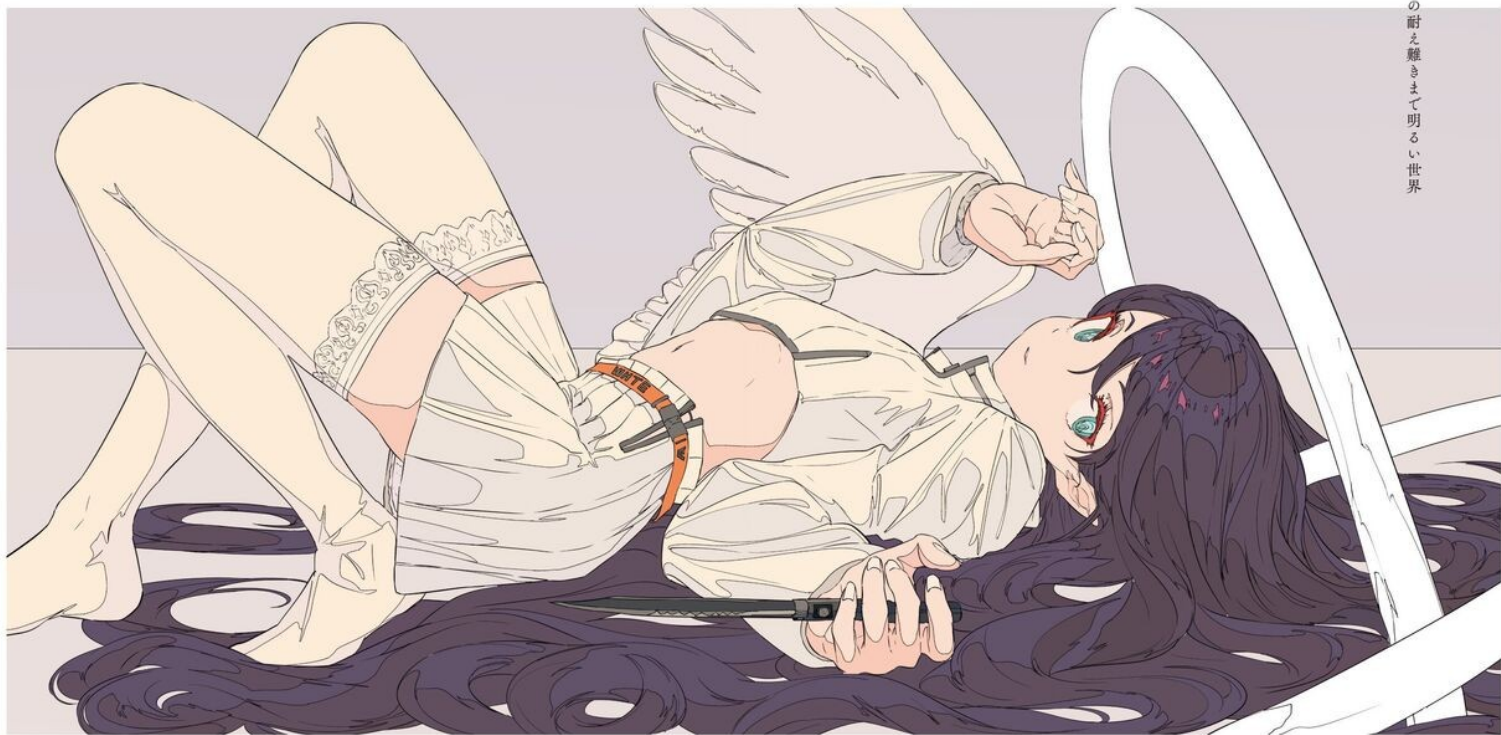


どの時間切れも愛しい
基下がり向日葵のゆれやまね世界で



八月の肌をながれる水のこと 来ないで
ゆめは日だまりだから

ふいに目覚めふいに眠ってゆくことの耐え難きまで明るい世界



死の眠り きうは花を手折りつつ冷たい肌によれていたんだ

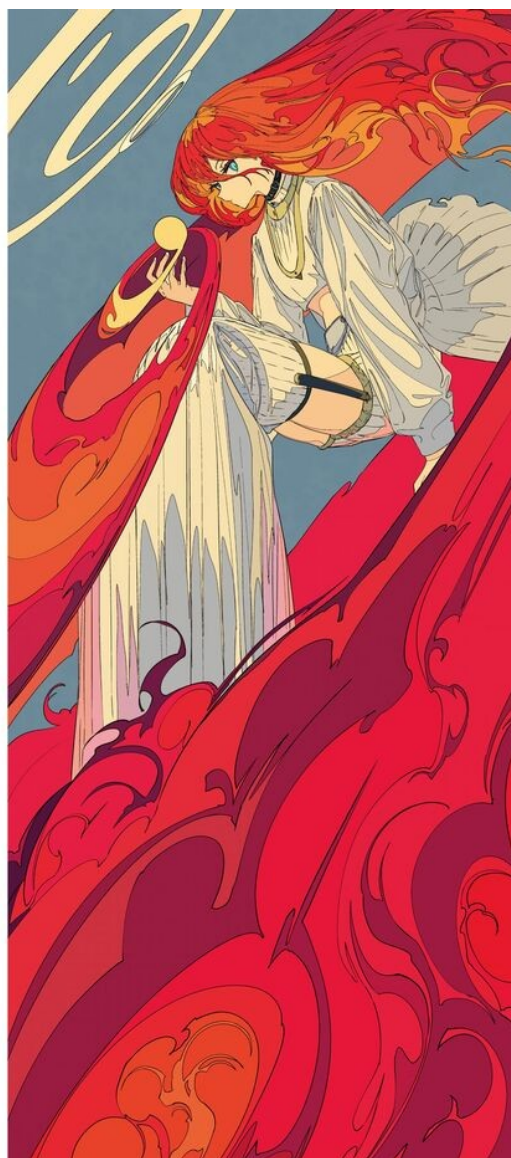


その日にはその日の地獄あることを告げつつ崩れゆく砂糖菓子

ほんとうはだあれも好きじゃないことのきらきらと陽に透かす手のひら



Inner Color Hair Angel



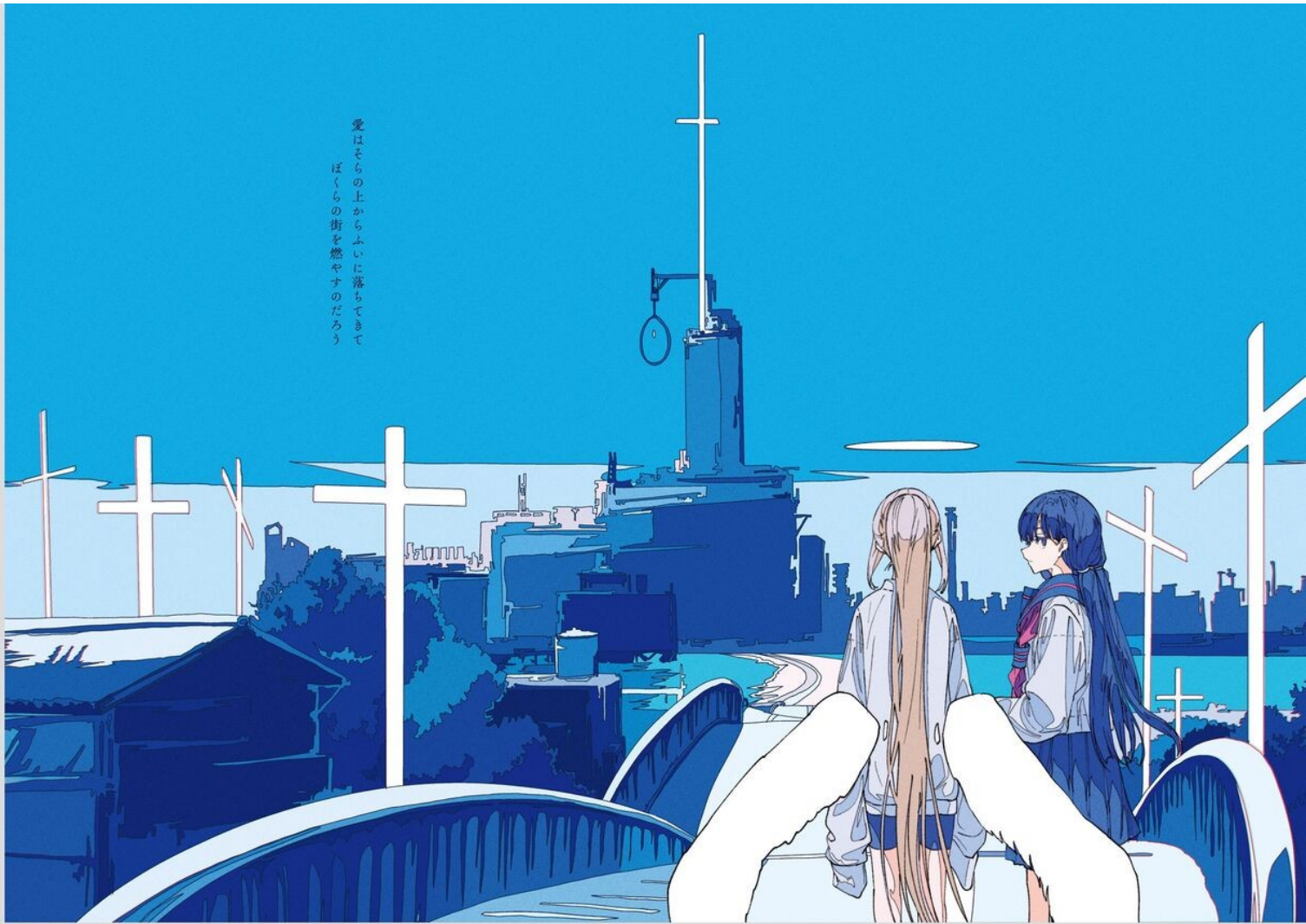
嘘まで溺れる きみの手のなかに光はまるで替人だから





ゆめうつらみへとつづくみちをゆく妄想こそが現実だから

愛はそらの上からふいに落ちてきて
ぼくらの街を燃やすのだらう



うす青いからすにゆびを這わすよう きみを視野へとおさめることは

点滴のどこまでもただきとまよ
時おりぼくは世界に



さらさらと硝子のかげらよる街の
とうしてぼくにころはあるの

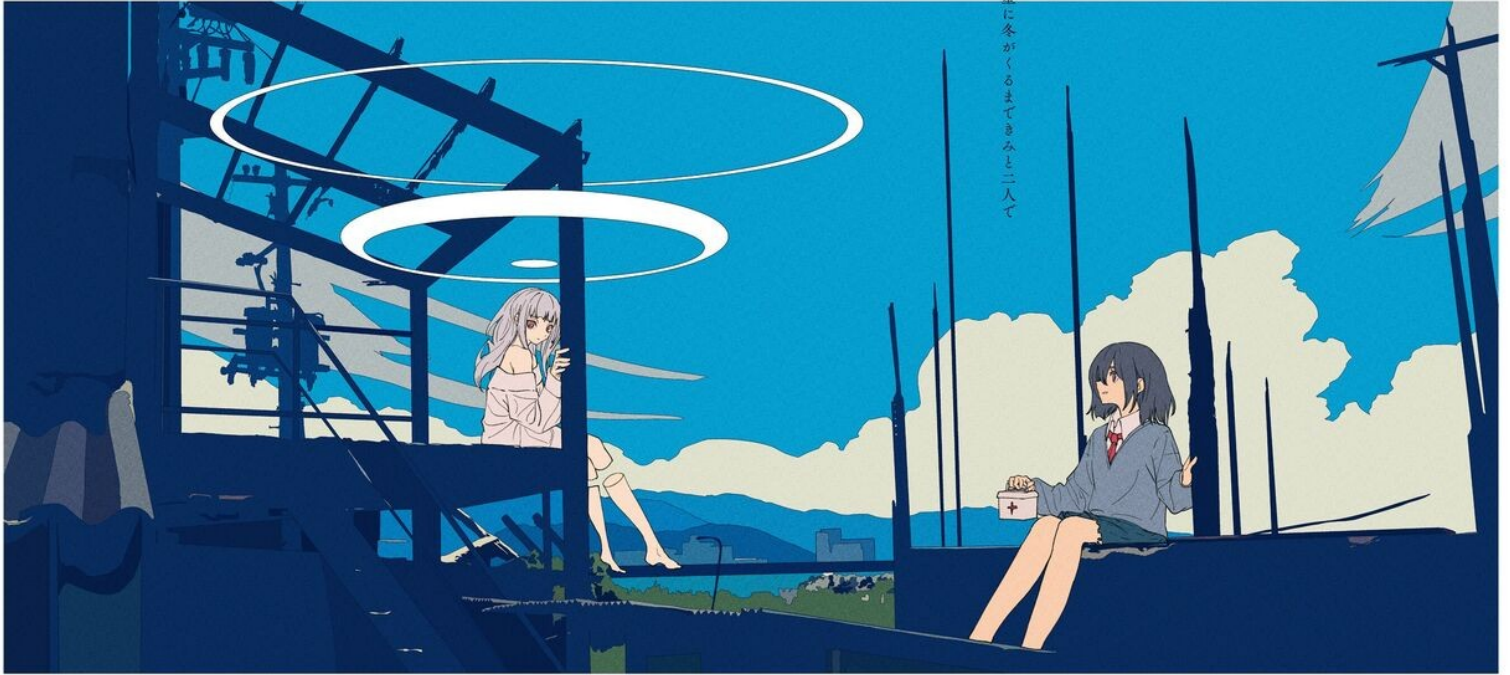
きみの眼がうつす滅びのやさしくて
やさしくてまたぼくは俯く

全部嘘でしかないことの懐かしも 浜辺には洗われた便箋

ゆれる船ゆられる肌のつめださのとこまで行けどこころは遠く



日々の骨、ひろいあつめてこの扉に冬がくるまできみと二人で





影に影重ねてぼくら空をゆく
きみが天使でなくなる夜も



冬の空
きみはことばに傷ついてそのきずぐちに光は集う

そこだけが冷たい自室しあわせはぼくの頭をこわしてしまふ





死ぬのはいつもはくの内
部の空ばかり
鳥たちは讃美歌を唄えど



持っもの
何ひとつない
ぼくだから
きみへと飛ばす
白い電波を

リセットをするたび夜のもかづいて折りだらうか言葉はすべて

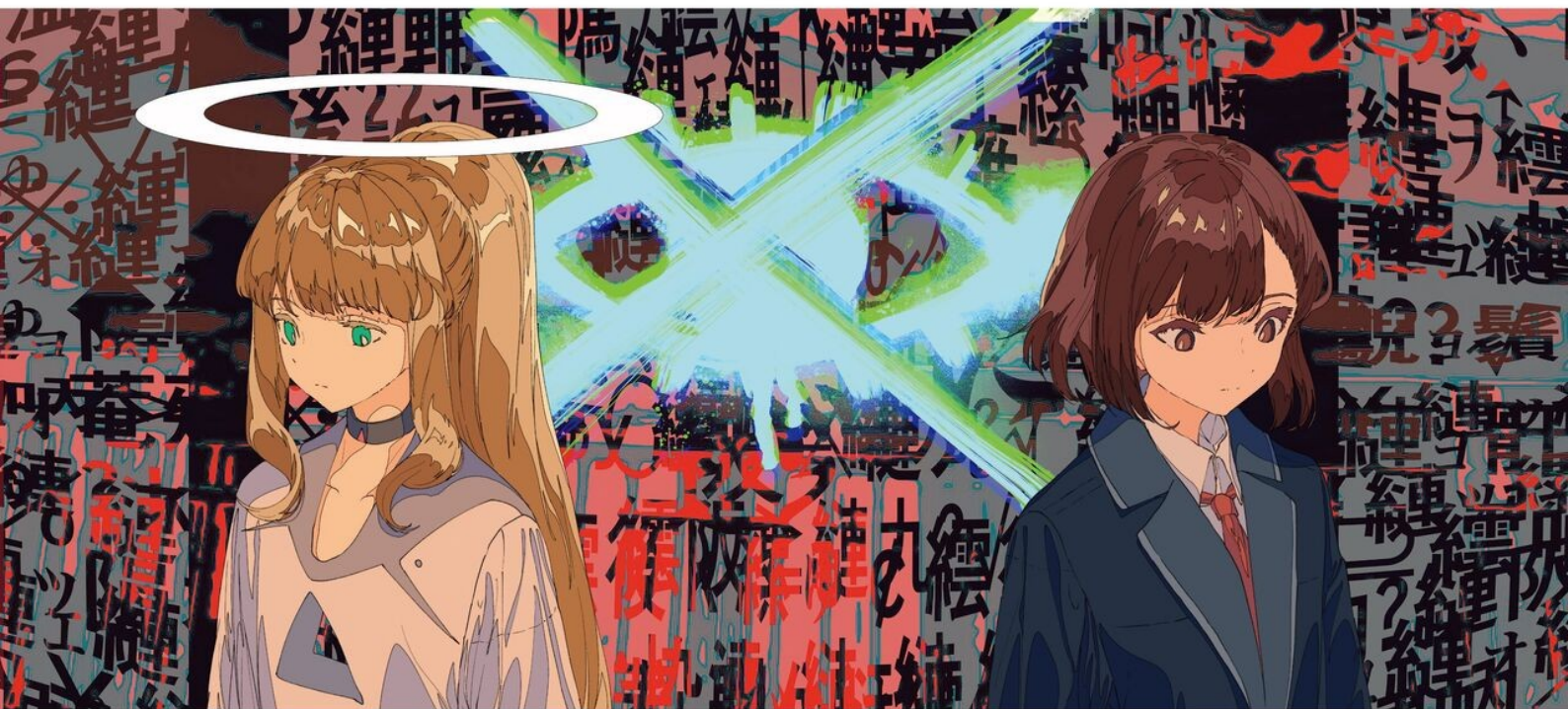




帰ろうか
手折ればゆめも向日葵もひとしく光りかがやく
廃墟

夢の中あるいは街の中で
ぼくは頻りに話しかける
ぼくの天使はどこへ行きましたか？
ぼくの言葉は何をしていましたか？
いつだって先に予感があった
未来は庭の椅子に腰掛けていた
とところどころ欠けたぼくの天井から
洩れ入る光 それは音のない記憶だった

非在の翅をもつ人
非在を生きるやさしい人
ぼくはきみのようになることはできない
世界はそこで行き止まり
ぼくはもう話さなかった
白紙の手紙を いつまでも握りしめたまま



第二部





きみの永遠は差しおさえられ
わずかに歪んでいる
—— そう ほんのわずかに

流れてくるのは骨組
きみの あるいはぼくの失った
鉛色の骨組 それは
ぐにやぐにやと柔らかく
みずを含んでふくらんでいる

きみは 見たことがあるか
ぼくたちの透明な街が ふいに
ただれた内臓を露わにする瞬間の
—— 顔のない白基を

警告はつねに碎かれ
この街の 果のない鳥に啄ばまれる
濡れたながい腕は
いったいとそこから垂れてくるのか
空はのっぺりと暗れている
空気は乾燥だ 途方もない乾燥
しかし この濡れた傷だらけの腕は
いったいとそこから垂れてくる

きみのいる公園の
錆びついた
噴水をぼくは知っている
きみが凝視している 幻影の
生臭いみずのことをぼくは知っている
でも ぼくはきみと出逢わない

きみは 公園のなかでずっとひとり
きみは そのほっそりした白い腕を
しずかに持ちあげて
太陽に透かしたりしている

きみは 気づいているか
白基が永遠につづくことを
そこには どんな言葉も
折りも入れないということを

もっと透明になれるはずだ
廃屋を見つめ
肺から絞られた夢想に
別れを告げることができれば
過ぎてゆく季節の
消えてゆく記号に
別れを告げることができれば
なれるはずだ
白い道に
息を詰めているところの
硬質な避難所になれるはずだ
橋をいくとも渡り
別れを告げることができれば
なれるはずだ もっと純粹な記憶に
記憶の彼方にある岸辺を
目指して進む 一隻の
帆船に





ゆめうつつ

蝶々さん
とこいくの
ひらひらひゅうと 光の粉

蝶々さん
あそびま
手拍子しゃしゃと 影踏んで

蝶々さん
つかまえた
ぱたぱたこしより 花の上

蝶々さん
さようなら
天使がぼくを 連れてゆくから

ぼくは誰でもないことで、誰かだった。ぼくは誰かであることで、誰でもなかった。水の輪が、ひろがってゆく。ぼくは、何かに運刻したのだ。それだけは確かだった。

だから

ぼくはここにいるの？

だから

きみはここにいるの？

この街の路上

この 焦げ付いた道の上を

だからぼくらは、えんえんと

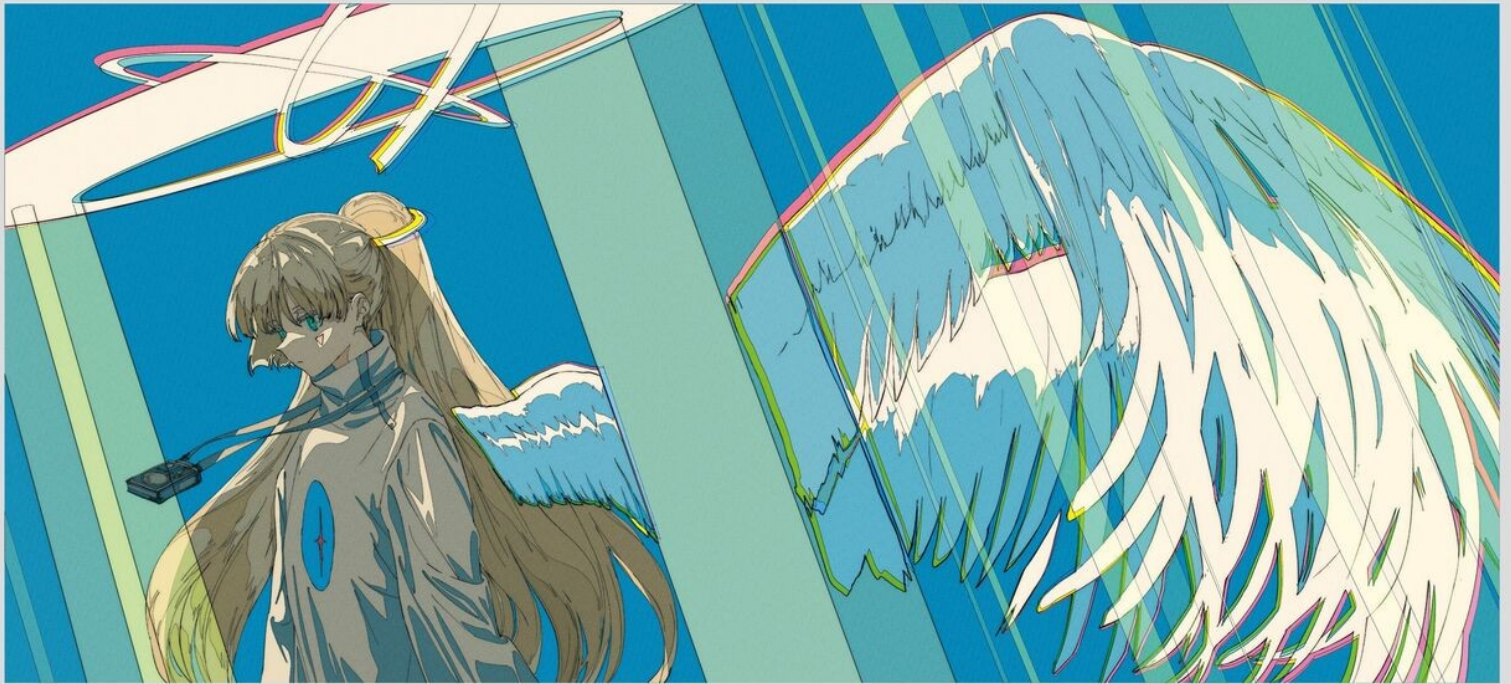
口もきかずにさまよっているのか？

世界は、ある遅れとしてしか知覚することができない。その、遅れのなかにしかぼくらは住むことができない。だから、

だから

きみはその美しい羽を
いつも重たげに背負っているのかい？

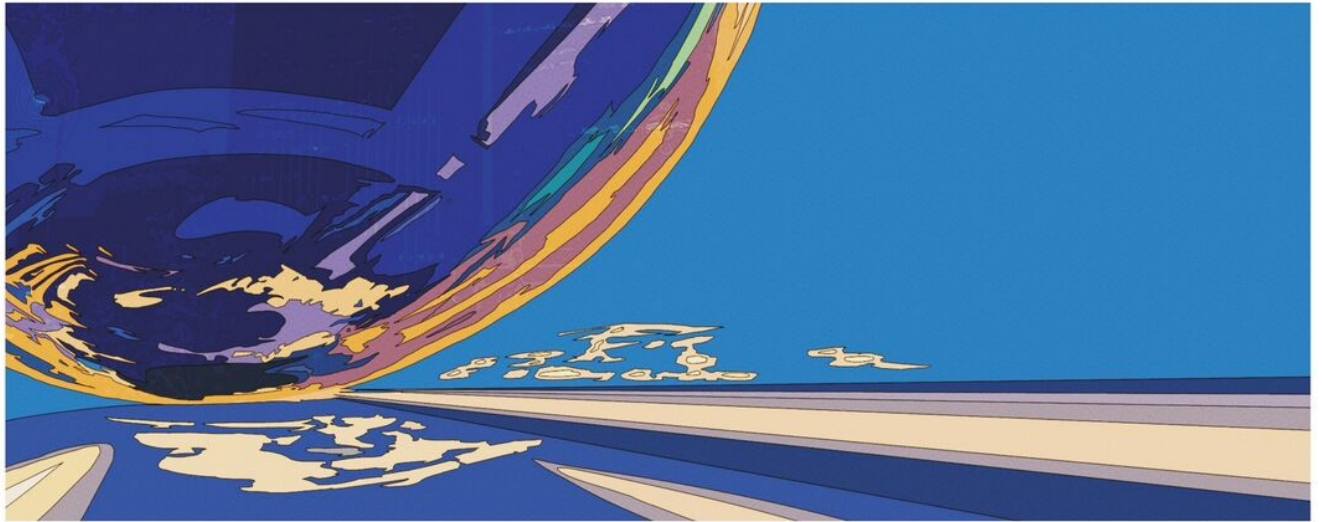




施錠

閉じられたドアの前にたたずんで
剥がされたくちびるには
ぬるいかぜとくちべにの色があつて。
鳥のこえが聞こえないのと
聞こえないのと絶えずいらだつて
はそくなつた指さきの
神経には枝のような屈辱があつて。
閉めきられたカーテンには
どこにも隙間なんてなかつたから
深まつた影と
未熟にたわひれて
幾重にも絡みあつた水滴に
舌さきの緊張はかくされてゆく。

こつこつと
聞こえはじめた音は
ここが部屋のいちばん奥であると
告げているようにおもえて。
かすかなしんとう。
爪さきにかけてゆくと力が
少しずつよくなって
もうどこにもいないってことに
気づいていたはずなのに
日が傾いたあとも
閉じられたドアの前にたたずんで。



気息さはアメ玉。舌に乗せて、転がしてみればこの甘さ。ぼくは、
ブルーのふちに腰掛けて、足をみずの、ぬるい煙めきに浸しながら、
いつまでも、いつまでも空っぽでありたいと、そう願ってたんだ。夕
ぐれ、天使のゆめは赤く燃え、空一面にひろがって。気息さはアメ
玉。思い出と共に、砕いてみればこの甘さ。



夕立

ポケットから死んだ蝶がとびたつ

またぼくは夢をなくしてしまった

透明なものを探し求めたばかりに

またぼくは夢をなくしてしまった

夕立がぬらしてゆく街のはずれで

またぼくは僕になろうとしている



約束

振り向けば消えてしまう
そこにあつたものも
あるはずだったものも
幼い記憶とともに
振り向けば消えてしまう
ひとりきりのぼくを
この街に残して

(遠く かなしみさえも置き去りに)

振り向けば消えてしまう
それは約束
いつか結んだ契約
振り向けば消えてしまう
最初から知っていた
だからこそぼくは この街で
きみを見つけたんだ

名前



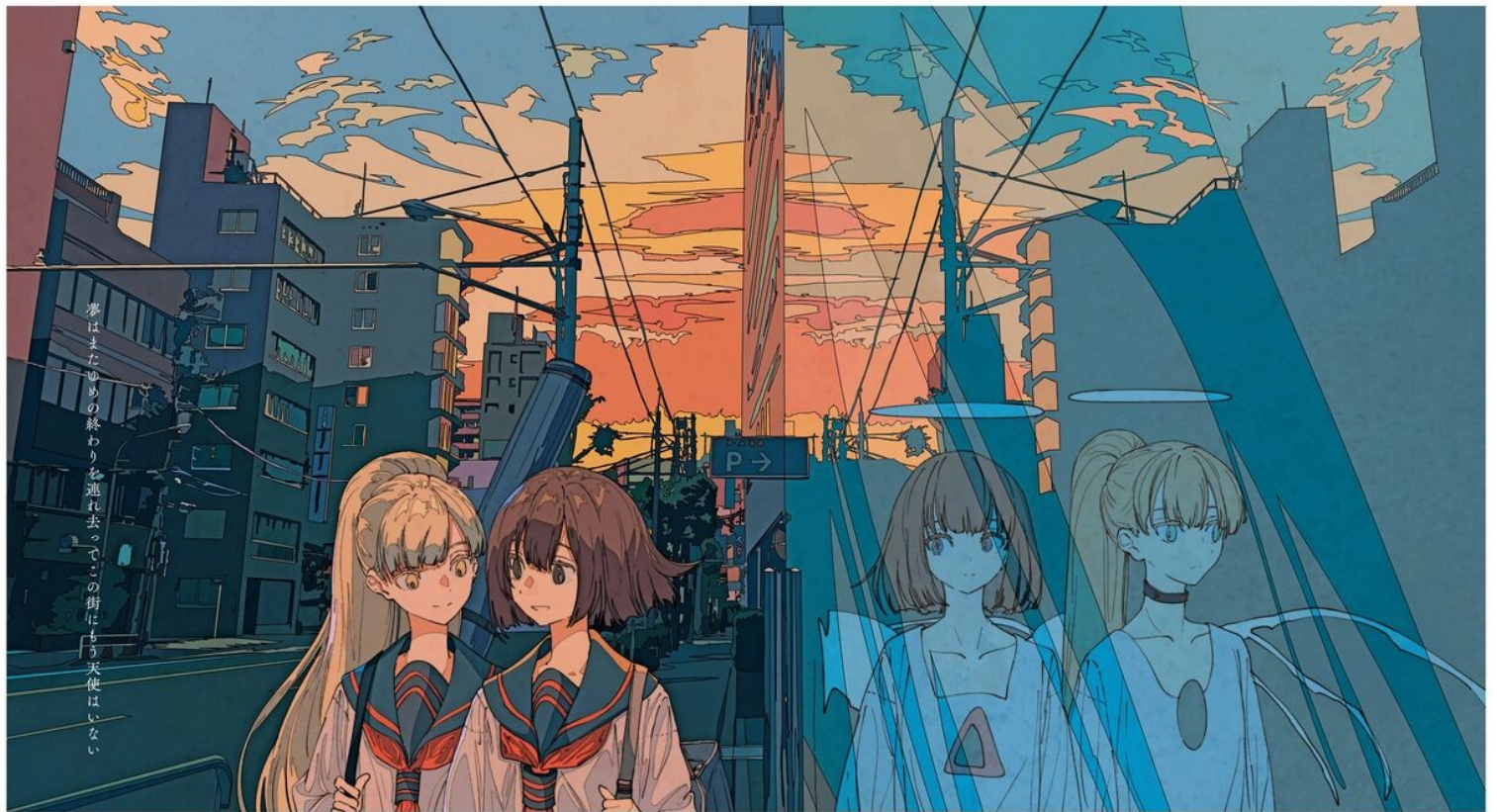
もう 時間だ
ぼくは名前を呼ぼう

そうして世界から
全ての影を消し去ろう

影がなくなれば
ぼくの言葉も消えるのだ

失われたものを
もういちど失ったとき

ぼくは誰かに
名前を呼ばれる



夢はまたゆめの終わりを逃れ去ってこの街にもう天使はいない

あらかじめ生という座標があって
その後にはやってきた けだるい季節を
きみは手のひらで撫でていた

明るい陽射しには
もうどんな予感もなかった
ぼくたちの街の 時計塔はとおい
光のなかに埋まっている

歩きつづけること それだけが
ぼくたちにゆるされたゆいつの行為
ざわさわゆる並樹の向こう側に
まっしろなベンチは置かれていて

きみは眩しそうに眼をつひる
足はすこしも止めないで
ぼくたちにはリズムがある
それを頼りに歩いてゆけば
きつと 躓くことはないだろう

あらかじめ生という座標があって
ぼくたちには
ひとつだけからだがあった

もうすぐ太陽は 正午の位置につく
そのときは きみと
このひとつのからだを
日向のなかに投げだしていたい



辛い時は海の見える場所に行くことにしてしま
す。
私は自分が、酔相当に大人になれていないと思っ
ております。ひたすら何かから逃げていた。
しかしその過程も美しいものだと最近思うようにな
り、そうして蓄積した退廃を、青臭さを、実直
を、形にすることは出来ないかと思いい今回の企画の
初案を練り始めた次第です。

岩倉さんはまさしく自分にとってとはとらえと
ころのないホログラムのようだと感じました。
しかし誤解でした。
紡ぐ言葉は脳細胞にズンと響く質量があり、退廃
的な香り香が強く尾を引く。

どこにも居ないがどこにも居る気持ち、「自
分」から生まれる衝動を描くことにひたひきであっ
たのです。

絵と言葉は密接な関係にあり、タイトルひとつ
絵というのには意味合いがまるで変わってきます。そ
れには内包する意味を縛るものや、新しい文脈を付
与する力がある。
自分の絵と言葉が同じページにあったらどう
か、同じ本にあつたらどうなるのか、こうなりやあ
試みずには居られないと腹を括り、声をかけさせて
いただきました。云い出さずは私です。

装丁の有馬トモユキさんは、言わずがなデザイン
の領域を超えて活躍してらっしゃるスゴい方であ
りますが、最初に私を小説の装画のお仕事に引き抜
いてくださった以来そりゃあもうお世話になってい
る方です。おそらく自分の青臭さや行動や絵に対
する意図や、所謂面白い部分を知っている方なの
で、今回の企画には岩倉さんと同様やはり欠けては
ならない存在でした。

と、云えば格好はつくのですが、この本の制作に
あつても迷惑をかけるだけかけてしまつたので誠
に頭があらぬ思いであります。二度と口を聞いて
もらえぬのではないかと心臓に氷が刺すような気持
ちであります。
とはいえ描き溜めのようであつた自分の作品群
を、掛い無く装丁に反映して下さり流石と云う他あ
りません。

以上です。
本書を作るにあたり携わってくださった方には謝罪
と大きな感謝を。
手に取ってくださった全ての方に感謝を。
またとこまで。

岩倉

天使に逢いたいと思った。

いつからかぼくの内に棲みついた、名も知らぬ無
愛想な天使。性別すらもあやふやなそんな存在は、
気づけばぼくは惹かれていた。
天使。

それは言葉をもたず、こころも知らぬ存在。よい
に視野をかすめては、遠くかすかに消えてゆく、幻
と呼ぶには明瞭な、それについて不確かな存在。本来
ならばただそれだけの、詩人にありがちな一時の妄
想で終わるはずだった。

しかし今回、あなたの奇縁か無茶さんと共に一冊の
本をつくる運びとなり、そこで再び、ぼくは「天使
」に巡り逢う。無茶さんもまた、内に「天使」を

棲まわっていたのだ！

この本は、詩に絵をつける、或いは絵に詩をつけ
ると言った、詩画集一般の発想からは隔たった場所
で生まれた。ぼくらは同時に作品をつくりはじめ
時には互いの作品を見せ合いながらも、それぞれ独
自に世界を深めてゆく方法をとった。

この本は言わば、ぼくと無茶さんの共作である
と共に、競作でもあるのだ。それゆえ作中のイラスト
と詩歌とは、必ずしもびびりたりと性格が一致してい
る訳ではない。だがそのすれ違い、軌道の奏でる音
色にこそ「詩」が、「天使」が宿るのだとぼくは思
い、それを買いた。

岩倉文也

無茶氏はデイスブレイ上の情報を過信しない、自
分て直接見聞きたものを血肉にするタイプの、今
と昔珍しい皮膚感覚をもった作家だと常々感じてい
ます。彼にいわゆる、作品的なイラストレーショ
ンの画集は出さなくても良いんじゃないかと言つた覚
えがあります。私のいちいさな我儘でした。表出する
姿勢や世界への態度そのものから、彼の作家性が出
れば良いと願っていました。

それは巡り巡ってこうした形になりました。初

作品集が岩倉さんと共著であることを焼肉屋で知
らされたとき、きっとこれは彼らしい、彼ら特有
の、素直な血が通った本になるだろうな、という予
感がありました。彼らは天使の本についてよく語ら
い、そしてよく食べました。

そうしたこともあり、無茶氏と岩倉氏の対峙がそ
のまま現れるような、飾らざるべく作爲のない、
素直な造本を目指そうと思いました。用紙も物珍し
さは狙わず、多く流通しているものが、また別の文

脈で見えてくるようなものをもと選んでいま
す。汗をかきタイプの仕事でも、ホルインワンを
狙う仕事でもありませんでした。ただ本棚を整頓す
るような意識はあつたと思います。その結果、両
氏の、あわいを現代的なまなざしとして捉えようとする
動きの一助になつていれば嬉しいです。細かなレイ
アウトをご一緒してくださつた田中氏にも、深くお
礼を申し上げます。

有馬トモユキ

フグチヤ
焦茶

歌するイラストレーター。1995年生。2016年よりイラストの仕事を受注しながら、自主制作作品も積極的に発信。主な仕事に「Fate/Grand Order 電撃コミックアンソロジー11」、「火曜新聞クラブ—最社登見台の探偵—」、「重カアルケミッタ」『少女楽園』(文庫版)の装画や、バーチャルライブイベントのイベントビジュアルなどがある。

Twitter: @BARD713

イワクラフミヤ
岩倉文也

詩人。1998年福島生。2016年頃より歌作、詩作をはじめ、新聞歌壇や詩誌への投稿を始める。2017年、毎日歌壇賞の最優秀作品に、2018年「ユライカの新入」受賞、同年「詩と思想」読者投票最優秀作品にも選ばれる。2019年、第24回中原中也賞最終候補、著書に「傾いた夜窓の下で」(晋土社)がある。

Twitter: @fumiya_fwakura



天使を見た

あなまのあなま

あの夏は

あの夏は天使を見た

あなまのあなま

あなまのあなま

"I saw the angel in the Summer"

あの夏^{なつ}ぼくは天使^{てんし}を見た^み

著者 焦茶・岩倉文也

2019年10月31日 発行
Ver.001

©cogecha / Fumiya Iwakura 2019

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
「あの夏ぼくは天使を見た」
2019年10月31日 初版発行

発行者 川金正法
発行 株式会社 KADOKAWA
<https://www.kadokawa.co.jp/>

●お問い合わせ
<https://www.kadokawa.co.jp/> (「お問い合わせ」へお進みください)
※内容によっては、お答えできない場合があります。
※サポートは日本国内のみとさせていただきます。
※Japanese text only

本電子書籍の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、
あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。
また、本電子書籍の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本電子書籍購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず
本電子書籍を第三者に譲渡することはできません。
本電子書籍の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。
本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に
予告なく変更される場合があります。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。



BOOK☆WALKER